
あおに重なる

がっちょ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ああに重なる

【著者名】

がつちょう

【あらすじ】

獣族と魔族がくらす世界、リトビスに現れたのは、記憶を失った少年。少年の存在はまさにありえないもので、困惑しながらも生活していく。リトビスの紛争に巻き込まれた少年は、自分に隠された大きな秘密を知っていく。

プロローグ（前書き）

初投稿です 文章力なんて全くないですが(̄_̄) のんびり書き
ますので、是非読んでください。

プロローグ

歪みのない綺麗な月

『届きそうで届かない

近そうで遠い

吸い込まれそうな黒

浮かぶ あおい月

ざわざわ薄れてゆく

僕の記憶の中の…

木枯しが吹きはじめたこの日。僕はいつもより学校へ行くため、家のドアを開けた。

肌寒い気温に体が震え、学ランの襟に首をづめる。

「ワン！ ワン！」

庭から愛犬、柴犬のコタローが駆けてきた。名前を呼ぶと、僕の足元を元気に走り回る。

「相変わらず元気だな。学校から帰ったら、散歩に連れていくてやるからな」

「わかった」とでも言つようの一際大きく吠えたコタローの頭を撫で、僕は道路に出た。

近所の人たちと挨拶をかわし、横断歩道にする。信号が丁度赤になり、足を止めた。冷たくなった両手を擦り合わせていると、目の前を軽自動車が走った。そのせいで、冷たい風が体を襲つ。

「寒つ」

『主様。お時間がきました』

知らない声。突如頭の中に響いた声に振り向く間もなく、視界は闇に包まれた。

ディマイオス大陸。

緑鮮やかな森の中。地には色とりどりの花が咲き、木の上では鳥がさえずつている。

田に照らされ淡緑に色付く森の中に、少女の姿があった。

少女は地面に座り、花を優しく摘み取つてはいる。

鼻歌を交えながら花を摘んでいた少女の耳がピンと立つた。その耳は獸のような白い耳。そして、スカートからは白い足と白い尾が覗いている。

少女は辺りを見回しながら耳を動かし、何かを見つけようとしていた。

すると、一点の方向を見つめ、摘み取つた花を握つたまま、その方向へ走り出した。

辺りを気にしながら走り、周りよりも少し太い木の裏を覗いたとき、

少女は「あっ」と声を漏らした。

視線の先には、木にもたれ掛かるようにして少年が眠っていた。少女はまじまじと少年を見た後、正面からその顔を覗いた。そして口を開く。

「だあれ？」

問い合わせに応えるように、瞼がゆっくり上がった。

始まり「1」

彼は目を開けた。

黒曜石のような瞳で空を見る。視界に広がったのは黄色い天井。

「……？」

火の光で辺りは明るかつた。ぼんやりとしていた意識がはっきりしてきただことで、寝ている自分の体に何かが乗っているのに気づいた。顔を少しあげてみると、足のところに少女が丸くなつて寝ている。そして彼は目を見開いた。

耳……なのか？

目を奪われたのは伏せられている白い耳。獣の耳を持つ少女をおこさないよう、体を起こそうとした。

が、思ったより体に力が入らず、足元の小柄な体を蹴つてしまつた。

「うん……」

小さな声に彼はピタッと動きを止めた。「ふああ」と欠伸をし、目を擦りながら少女が起き上がる。

開いた青い瞳が彼を捕らえると、表情がぱあっと明るくなつた。

「目が覚めたんだ！」

眼前にせまつた少女に少し後退する。

「森の中で寝てたんだよ」

「森？」

「うん。カミアが見つけたの」

「カミア？」

「カミアだよ」

自分を指して言つたところから、「カミア」というのは少女の名前
のようだ。

カミアは膝立ちになり小首をかしげた。

「あなたは？」

「えつ」

「あなたの名前は？」

そう訊かれ、答えようと口を開いた彼の動きが止まった。

僕の…名前？

どれだけ頭の中を探るうとも、答えは出でこない。それ以上に恐怖
が溢れてきた。

彼の中には何も無かつた。

「僕は一体…」

呟いた言葉にカミアが首をかしげていると、部屋の大きなドアが勢
いよく開かれた。

ドタドタという荒々しい足音と一緒に三人の男が入つてくる。

「カミア、身元の知れない者を城に入れたといつのは本当か…」

先頭にいた金髪の男が叱るような口調で言つた。

「 もう、 ケイーー。」

カミアが頬を膨らませていると、 一番後ろにいた茶髪の少年がおどおどした様子で前へ出た。

「 申し訳ありません。 バレてしましました」

「 ケイーのドジ！ 約束したでしょー。」

「 カミア、 我が儘はよせ」

田の前の会話を、 彼は呆然と見ていた。 驚いたことに、 カミアと話している一人にも獣の耳があるのだ。

金髪の男はカミアと同じ白い耳と尾。 少年は茶髪より薄い色をした、 ふわりとした耳と尾である。

「 ひつー。」

急に右耳の辺りを触られ、 とつさに右側を見れば、 一番田に入つてきた緑髪の男が、 彼の黒髪をあげて耳をじつと見ていた。 そしてこの男にも獣の耳と尾。

「 この子、 獣族じゃないみたいだよ。 魔族でもないし」

「 それは本当か！」

そう言つなり、 金髪の男は腰の剣を抜き、 切つ先を彼にむけた。

「 おい、 お前は何者だ」

「 いや、 その…僕は…」

突然刃物を向けられ、混乱している彼の脳裏がフラッシュした。何もなかつた頭の中に、ある文字が浮かぶ。

「神崎……神崎郁斗です」

「は？」

「僕の名前……です」

「カンザキ？ おかしな名だ。カンザキとやら、どうやつて城に入つた」

「城……？」

その言葉に彼……郁斗はぽかんと口を開けた。

「まさか、知らなかつたとは言わせんぞ」

「はいその通りです」と言つてしまえば、口と鼻の先にある剣が牙をむく。そう判断した郁斗は何を言えばいいのかわからず、目を泳がせた。

そんな彼を助けたのはカミアだった。

「もひー！ やめてよヴィル」

郁斗と剣の間に割り込み、男を睨む。

「さん付けで呼べと、何度も言つただろひ」「意地悪なヴィルはヴィルでいいもん」

眉をピクピク動かし、今にも怒鳴りそつた男の肩を、緑髪の男が掴んだ。

「落ち着けよヴィル。冷静になれって」

「なんだ、お前から斬られたいか」

「お恐う。さつき言つただろう、この子は獸族でも魔族でもない。よく見る」

「なら一体…」

金髪の男は何かに気づいたかのように顔を上げ、郁斗を見た。次に何を言われるのかと思い、郁斗の体が固くなる。

「嘘だ。魔力が無いだと…？ それに黒の眼…」

「そう、ありえない組み合わせだ」

「黒眼の人間…」

心底驚いた様子の男は剣をおさめ、踵を返す。

「とりあえず兄上に報告だ。それまでここを動くな。行くぞ、リイド」

「はーい。それじゃあね」

二人の男が部屋を出たことで緊張が解け、郁斗は大きなため息をついた。

静かになつた部屋の中で、一番最初に動いたのはカミアだった。

「どうしよう、アズにみつかっちゃう」

「仕方ありませんよカミア様」

目の前でショボンと垂れている耳を見て、郁斗はカミアの頭を撫でた。

「よくわからないけど。僕のせいで迷惑がかかつてるとみたいだね」「違うの。悪くないから」

今にも泣きそうなカミアの頭を撫でていると、茶髪の少年がベッドの側に立つた。

「改めましてカンザキ様。僕はカミア様の従者、ケイト＝リガルと申します」

「あ、神崎郁斗です。別に「様」とかつけなくとも…。名前で呼んでください」

「カンザキというのが名前では？」

「神崎は名字で、郁斗が名前です」

「不思議な名前ですね、イクト様は」

「いや、だから「様」は…」

ケイトは困ったように笑う。

「僕は従者の身なので。ではイクト殿でどうでしょ。僕への敬語は不用です」

ケイトは笑顔のまま言った。

これ以上何を言つても彼はきかないだろう。そう思った郁斗は頷いた。

どこか固い自分の呼び方に疑問をもつたが、何も聞かないでおいた。

「それでは」ケイトが何かを差し出してきた。
「イクト殿が來ていた服を綺麗にしておきました」

そう言われ、郁斗は今自分が下着一枚の状態であることに気づき、

ケイトからひつたくるように服をとつた。

自信が着ていたという服を着た郁斗は困惑していた。

「ここはどこなんだろ。」

ここの人たちは皆、動物のような耳と尾があつて、どうも違和感がある。

僕がそうじやないからかな。

それより僕は？

自分がわからなくて…恐い。

「イクト、真っ黒だね」

カミアの声で我に返つた。

「やうだね、カミア」

自分の姿を見て郁斗は同意した。黒の学ランに黒髪黒眼、まさにカミアの言つ通り。

「そういえば、やつきの一人は誰？」

「ヴィルとリイドだよ。ヴィルは意地悪で、リイドは面白いの」「最初に入つてこられた方がヴィンセント様で、一緒におられたのがリイド様で…」

カミアの説明では郁斗が理解できていないと察したのか、ケイトが付け加えた。

ベッドのシーツを整えて郁斗を見たとき、その目が大きく開かれた。

「イクト殿、魔力が」

「へ？」

魔力？ さつきもそんなこと言つてたな。

訊こうとしたとき、部屋のドアが開いた。

そこに立っていたのは、ヴァインセントとリイド。

「おいお前、ついて来い」

「ヴィル！」

走り出そうとしたカミアをケイトが止める。

「ケイト、カミアをつかまえておけよ」

「はい……」

カミアとケイトにこれ以上迷惑はかけたくない。そう思つた郁斗は、「行くぞ」と言つたヴァインセントの後をついていった。

大きな廊下を歩く。ヴァインセントとリイドは背が高く、足も長いせいか、郁斗は一人の後ろを小走りに走つていた。

「どこへ行くんですか？」

「兄上のところだ」

「兄上？」

この人兄弟がいるんだ、と思つてゐる郁斗に振り向くことなく、ヴァインセントが続ける。

「俺の名を聞いただらけ。それで分からんのか

はあ、とため息をついて言つた、ヴィンセントの言葉に郁斗は絶句する。

「俺の兄上は王だ」

「お前がカンザキイクトか」郁斗はヴィンセントに険をむけられた時以上に、体をこわばらせていた。

通された場所は大きな空間。天井はガラス張りで光がよく入り、「神聖」という言葉がぴったり合つ。

郁斗が見つめる先は壇上。そこにある大きな椅子に座った人物だ。

「私を知らぬようだから名乗つておけ。私は獣族の王、アスライト＝ベオ＝ランティーヌだ」

獣族の王、もといヴィンセントの兄は郁斗に微笑んで言った。

王と言えど、容姿は若い。

ヴィンセントと同じ金髪に白い獸の耳。しかし、短髪の弟とは対比に、兄は襟足まである。

温厚な雰囲気を醸し出しているが、どこにも隙をみせていない。目を留められた瞬間、郁斗の体は直立してしまつた。

「おい、何が言つてみてはどうだ」「は、はい！ 神崎郁斗です！ あ、神崎が名前で郁斗が名前です」

ケイトのような勘違いをおこなつて、きちんと名乗つておく。

「本当に魔力は微塵にも見られないな。見える魔力はその服からでている」

この服から？

学ランを見ていた郁斗の左側からヴィンセントが発言した。

「兄上、こいつが人間なわけないだろ？」「

「だが現に目の前にいる」「

「こいつは黒眼だ。なら魔族だろ。しかも…」「

「それないわ」

ヴィンセントの言葉が遮られた。

初めて聞く声に振り向くと、柱の影から女が出てきた。

左に流れた朱の髪を揺らしながら、女はゆっくり近づいてくる。

綺麗なひと…。

けど、あの耳は…？

郁斗が目を留めたのは彼女の耳。郁斗と同じような形をしているが、それは長くとがっている。

近づいてきたかと思えば、少し腰を折つて郁斗の顔を覗いた。綺麗だと思っていた顔が目の前に迫り、郁斗はドキリとした。

「眼の色は本物。けれど魔族じゃない。耳も全然だしね。突然変異の可能性もゼロ。今までの事例で人間との間にできた子供は全て魔族。それは獸族も同じでしょ」

女の言葉にヴィンセントが口を紡ぐ。

「じゃあシャリー、この子は人間なのか？」

「そういうことになるわね」「

リイドにシャリーと呼ばれた女が頷く。

「それと記憶も無いそうだな」

「ふん。何も知らない顔して、何かたくさんでいるのかもしれん」「そんな、僕は本当に…」

反発した郁斗の目先に、再び剣がむけられた。

「さあ、どうだか

「『ヴィル!』」とこうリイドの声も聞こえてないらしい、ヴィンセントは、低い声で言った。

いやだ…！！

再び襲つてきた恐怖に郁斗が叫んだ。

その瞬間、キンッ という金属音。ヴィンセントの手にあつた剣が、少し離れた位置に落ちる。

何が起こったのか理解できていない郁斗を、全員が驚愕の目で見て いる。

「えつと…今何が…？」

「魔力で弾いたようだな」

いたつて冷静にアスライトが状況を把握する。

「何故人間が魔力を！」

「どうやら服にこめられた魔力は、彼を守るためにあるよ!」

会話に追いつけない郁斗はおろおろするばかり。

「カンザキイクト」

「は、はい」

アスライトに呼ばれ、小さく返事をする。

「お前を人間としてこの城で保護しようつ

「兄上！」

「リドビスを学ばねばならないからな、ヴィンセントの従者として

居座れ」

それは郁斗にとつて嬉しい話だ。記憶のないままどいかへ放られてしまつたのでは、と思つていたといひだつたのだ。

このままじゃ、どうにもならなつてしまつた。

お世話になつてもこいよね。

「はい、わかりました。よろしくお願ひします」

「イクト、でいいんだつナ?」

「は」

アスライトと話を終えた郁斗は今、ヴィンセントの部屋に来ていた。ソファに座り、隣のリイドと血口紹介をしていく。

「俺はリイド＝マスイート。騎士団の副隊長やつてんだ」

「騎士なんですか！ すげーですね」

「そんなに誉められてもなあ。毎日忙しいんだぜ、隊長にしきつかわれて」

「隊長は誰なんですか？」

興味本意できいてみた事に、リイドは視線を上げた。

「あそこ」の仮頂面」

リイドの視線の先には、机で執務をこなしているヴィンセント。自分で中で一番恐い人に指定されている人物が隊長と知り、郁斗はソファの上を後退する。

「おー、ヴィル。イクトに説明することが山ほどあるんじゃないのか？」

「明日から6時に俺の部屋に来い。お前の部屋はケイトと同室だ」

顔を上げることなく言った言葉に、リイドがため息をついた。

「『言ひ』とはそれだけかよ」

すると、ヴィンセントは今まで書いていた紙を床へ放した。床に落ちる既の所でリイドが拾つ。

「あとはお前の仕事だ」

「面倒事は全部俺かよつ！　はいはいわかった、行こうイクト」

リイドについて部屋を出るとき、郁斗はふと後ろを向いた。数秒とかからないうちに、ヴィンセントが見返す。

「なんだ」

「あ、いや。明日からお願ひします」

「言つておぐが」持つていたペンを郁斗にむける。

「俺は兄上の命でお前を従者として扱う。それ以外は何一つ、お前

の存在を認めんからな

「…はい」

郁斗は痛々しい視線を背に感じながら部屋を出た。

「なに気にするひとないって」

廊下を歩きながら、リイドが郁斗を励ます。
先ほどヴィンセントの部屋を出でから、ずっと何かを考えている郁
斗を見かねたのだ。

「あ、いえ。リイドわざと、ヴィンセントさんとは仲がいいんですね？」

「なんで？」

「いや、ヴィンセントさんとのことを愛称で呼んでるから」

「まあ、幼なじみとこいつか。もつかれこれ25年付き合つてるから
なあ」

「リイドさんていへつですか？」

「25」

答えたリイドは郁斗をじっと見る。

「イクトは13に見えるけどな」

「僕は17！…のはずです」

「17？見栄はりすぎじゃないか？」

「本當ですか？」

「ははっ！ そりやわるかつたよ」

氣さくに笑うリイドにつられ、郁斗も少し笑った。
ここへきて、初めて笑顔になれた瞬間だつた。

灯りが灯つた薄暗い廊下を歩いていて、もう口が渇んでいたことに
郁斗は気づいた。

そして、一人が来たのはある部屋の前。

「ここは？」

「ケイトの部屋だ」

ドアを開けると、部屋の中にはベッドのシーツを整えていたケイト
がいた。

「イクト殿！」

郁斗を見たケイトの顔が晴れやかになる。小走りで駆け寄ってきた。

「聞きました。ヴィンセント様の従者をすることになったんですね

「うん。よろしくねケイト」

「僕も嬉しいです。イクト殿が城に残ってくれて」

ケイトは郁斗の右手を握り、上下に振る。よほど嬉しいのか、茶色
のふわふわした尾が左右に揺れている。

「あ、そういえばカニアは？」

「あれから大泣きで……。泣き疲れて寝てしまいました」

「明日、ちゃんと謝らないとね。心配かけたみたいだから

「おつとお前が、喜びの再会は今まででいいか？」

リイドが紙をひらひらさせて言った。

「あ、そうでしたね。説明お願ひします」

「おひ、いじゼ」

リイドは紙に目を落とすと、直ぐさま嫌な顔をした。紙一面に文字が綴られていたからだ。

「えーっと、無断に城内をうろつくな、見知らぬ者と口をきくな、面倒をおこすな、些細な変化も報告、俺の命令は絶対……だあーーー！ 細けえつ！！」

読んでいたリイドの声は次第に小さくなり、しまいには内容に苛ついたのか、頭をかきむしめた。

「こんな内容だらうと思つたぜ。いちいち煩いやつだ」

「はは…。ワインセント様らしいですね」

苦笑いのケイトの隣で、明日からの仕事に心配を募らせている郁斗。

「まともな事は書いてねえのか？ お、これが」

ある一文を見つけたリイドは郁斗に近づいた。

「動くなよ」と言って右手をかざす。

何が起こるのかと思つていた郁斗の目の前で、何かがパツと光つた。

「よし、これでオーケーだ」

「え、何がですか？」

「見て下さい」

ケイトが持つた鏡を見た郁斗は目を丸くした。黒眼だつたはずの自

分の瞳は、紫に変わっていたのだ。

「俺の魔法で眼の色を変えさせたひがつたぜ」

「ま、魔法！？」

「聞きたいだらひがつたじ回して元にしてくれ。えつと次は……」

そんなん……！

「その服は常に着ること。後は、これだな」

リイドが何かを取り出した。それは、細いヘアバンドの両端に獣の耳がついたもの。

「それは？」

「まあまあ、つけてしまつて」

ヘアバンドをつけられ、耳もつけられた。耳の中は空洞になつていて、そこに一度郁斗の耳がはまる。

「……なんですかコレ？」

「イクトが人間だつてバレないようにするためだ。それと尻尾」

ふわふわの茶黄色をした尾を手渡される。

なるほど、コレで獣族になりますといふことですね。
でもなんか……すごい恥ずかしいんですけど……。

「うーふわふわ……。てか本物みたい……。

そこまで考えて、郁斗にある恐ろしい考えが浮かぶ。

「あの、一応確認しておきたいんですが…。これはまさか本物…」「安心しな。魔獣の毛でつくられた造りものだ。それよりそっちもつけてみろつて」

リイドにいわれ、尾についたフックをズボンに引っかける。ケイトが持っている鏡を覗くと、眼の色も変わったせいか、郁斗は獣族になっていた。

「へーすごい」

「今、イクトが人間であることを知っているのは極限られた数人だけだ」

「どうしてですか？」

「最後に」

またもや放らかされ、今度ばかりは郁斗の眉が歪む。

「常識をつけろ。以上だ」

「常識…」

「そうこうじで、俺は帰るな。明日から頑張れよ」

右手をひらひらさせながら、リイドは部屋を出ていった。

ほとんど投げやりですね…。

ガクンと頃垂れた郁斗に、慌ててケイトが話しかける。

「イクト殿！ 分からないことは僕に聞いて下さい。助けになりますから」

「ありがとうございます。それであ」

「なんでしょうか？」

「今日はもう疲れたから、寝てもいいかな」

体力的にも……内面的にも……

郁斗がこの世界に現れて3日がたつた。そして世界のことも少しづつ知つていった。

毎晩寝る前にケイトから少しづつ。

この世界、リトビスには大きく分けて大陸が3つある。ディマイオス大陸、セガル大陸、フィライト大陸。リトビスには魔法が存在し、生き物には魔力がそなわる。が、唯一魔力のなあ種族がいた。それが人間。

3つの大陸には主にそれぞれ、獣族、魔獣、人間が住んでいた。しかし、もうリトビスに人間は一人としていない。

「どうして？」

「それは…明日にしましょう。今日は長すぎましたね」

昨日言われてから、郁斗はずつと話の内容が気になつていた。そのせいか、郁斗はいつも以上に失敗を繰り返していた。ガシャンッ

「熱つ！」

5つ目のコップが今割れた。5つというのは、郁斗がヴィンセントに「茶をいれる」と言われる度に割ったコップの数。

ケイトに教えてもらつていてるときは、なんなくこなしているのだが、ヴィンセントがいるせいかどうもうまくできない。

背中に痛々しい視線を感じて振り向くと、「またか」と言わんばかり

りの皿をむけるヴィンセントの姿。その眉間に皺が寄る。

「「」「ごめんなさい…」

「もういい。片づけたらこれを届けて…」

「はい…」

床に散つた破片を集め、ヴィンセントが指した書類の束を抱えて部屋を出た。

一人になつた男はため息をつく。

兄上はあれを監視するつもりで従者にしたんだらうが、これでは逆に目が離せない…。

やつは失敗ばかりして、俺の仕事を増やしているとしか思えん。

「おーい、ヴィル」

そこへ、入れ違いにリィドが入ってきた。

「随分疲れた顔をしているな。イクトは頑張ってるか?」

「どうだか。茶もろくに入れられない、腕力もない。全くもつて使えん」

「そう言うなって。イクトだって一生懸命なんだよ」

「どいか変わつた様子もない。何も思い出さない。あいつの謎は深まるばかりだ」

ヴィンセントは頭をおさげ、もう一度深いため息をついた。

「で、そのイクトはどこに行つたんだ?」

「アッシュの所に行かせた」「アッシュ? 会わせるのか?」

「奴は研究にしか興味がない。別に大丈夫だろ?」

ズボンに取り付けられた赤茶の尾を揺らしながら、郁斗はトボトボと廊下を歩いていていた。

「はあ、またやっちゃんつた。ヴィンセントさん、すぐ怒つてたしふと、横にあつた窓に映る自分の姿を見た。とたんに羞恥がこみ上げる。その原因はこの耳と尾だった。

なんだね? ハンをつけてると凄く恥ずかしいんだよね。

付けたことあるのかな?

「もえ」って言葉が浮かぶんだよね。

すると、窓の下の方で小さな影が動いた。覗いてみると、下の庭にカミアとケイトの姿があった。

カミアが花を摘んでいるのを、ケイトが見ている。カミアは郁斗のことが余程好きなようで、休憩中はもちろん、仕事中にも姿を現しては郁斗にくつづけていることが多々ある。

ケイトは耳と尾をこれほどかといつほど下げ、謝りながらカミアを連れていく。

その度にヴィンセントは、今にも怒鳴りそうな気持ちを抑えているのがよく分かる。

自分を慕ってくれるカミアとケイトに会うことが、郁斗の心地好い時間になっていた。

ケイトに毎晩、いろいろと教わるのも楽しい。

次の休憩の時は外で遊ぼうか。そんなことを考えながら、郁斗は廊下を歩きだした。

書類の届け先は「第一研究室」となっていた。

リトビスで文字を見たとき、初めて見たはずなのに郁斗は読むことができた。

だが、不思議なことに書くことはできない。

文字を書けば、郁斗にしか分からぬ文字。

読み話しさできるが、書きはできない。郁斗の謎のひとつだ。

郁斗はポケットから城内の地図を取り出す。

ヴィンセントから渡されたこの地図は特別なもの。地図を広げると、赤い一点が灯る。これが郁斗の位置。

この地図は持ち主の現在位置を示してくれるものだ。

「えっと、第一研究室は…。あつた」

目的の場所を見つけて歩きだすと、地図上の赤い点が動きだす。これで迷子にならないですむ。

研究室つて、何研究してるんだろう…
にしても、広くて長い廊下だなあ

実は城内を一人で歩くのは初めてだった。
ケイトと使っている部屋とヴィンセントの部屋は同じ階にあり、さ
ほど遠くない。

今までは、ヴィンセントの身の回りの仕事をしていたので、初めての
城内に、郁斗は観察しながら歩く。

へえ、やっぱり王様の住む城はすごいなあ。

壁の装飾は細かく、高貴な雰囲気が漂う。
途中でいくつもの部屋を見つけ、誰の部屋なのか考えていると、何
かとぶつかった。

「わっ！」
「おっとー！」

郁斗の手から書類が離れ、宙へ舞い上がる。
同時に郁斗は尻餅をついた。

「いたた…。あ、すいません！」

慌てて辺りに散らばった書類を集める。
すると、相手側も手伝い始めた。

「ほー、ビーズ」

ほとんど拾つたところで、相手が集めた書類を差し出した。

「ありがとうございます」

立ち上がった時、ぶつかつた相手は郁斗と頭一つ分背が高かつた。郁斗より少し年上だらう。

深い縁の髪に、薄い眼鏡をかけ、丈の長い白衣を着ている。そして、彼は獣族だった。

「ぶつかつて悪かつたな。前見てなくつてさ」

「あ、僕の方こそ」

「見ない顔だな。新入り？」

「はい、3日前に」

「へえ。それでどこに行くんだ？」

「第一研究室です」

郁斗が場所を告げると、彼は「おお」と言つて郁斗の肩を叩いた。

「俺も今からそこにに行くところだつたんだ。丁度いいし、一緒に行

「か？」

「本当にですか！ 助かります」

「堅苦しいなあ。俺はオリバ。第一研究室で助手やつてんだ」

「僕は郁斗です」

一人は研究室まで並んで歩いた。

その間に郁斗が自分の仕事場を教えると、オリバは目を大きく開いて耳を逆立てた。

「イクトつてあの鬼隊長のところで働いてんのか。大変だな」

「鬼隊長…」

それがすぐにヴィンセントのことだと気づいた。

日頃から殺氣に似た視線を浴びて居る郁斗には、ヴィンセントが鬼隊長と呼ばれる由縁がなんとかく分かった。

「まあ、それなりに頑張ってます」

ほとんど失敗ばかりして、呆れられてるんですけど…！」

内心ではやつ叫びながら、郁斗は苦笑いをつくる。

「ううだぞ」

しばらくして到着した田の前には、他とは違つて鉄のドアがある。

何の研究をしてるんだろう？

「先生、 入りますよ」

一回ほどノックをして、オリバはドアを開けた。

「げつ！」
「わあ……」

部屋とは思えないほど汚い光景に、オリバは顔をひきつらせ、郁斗は口をぽかんと開けた。

「2日来なかつただけでこの有り様かよ……」

オリバは「先生！」と言いながら、足の踏み場もない部屋に入つていいく。

後に続いて郁斗も足を踏み入れる。

「先生え。生きてますかー？」

ガラガラッ

奥のごみが盛り上がったかと思うと、その中から人影が現れた。そこには、ボサボサな明るい茶髪の女。そして彼女は、魔族。

確かケイトが言つてたなあ。

獣の耳と尾をもつのは獣族で、構造は人間と同じだけ、長い耳をもつのが魔族だつて。

「オリバ…」

「先生！ また散らかして！ 2日俺が行かなかつただけでこの有り様ですか！」

オリバは両手を腰にあて、叱りつけるように言つた。女は全く動じず、下に隈ができた皿を擦る。

「オリバ、この人は？」

「ああ、研究にしか興味のない俺の上司、アッシュだ」

郁斗の存在に気づいた女、アッシュは「お前…」と呴いて、郁斗を凝視する。

「先生、こいつイクト。先生に用事があるんだと」

「これ、ヴィンセントさんからです」

書類を差し出すと、彼女は何故か受け取らず、頭をひねる。

「ヴィンセント…？ ああ、ヴィルからか」

あれ、この人ヴィルって呼んだ

ヴィンセントのことを愛称で呼ぶ者は少ない。愛称で呼んでいると
「いつ」とは、それほど親しい間柄なのだ。

郁斗は頭の中でアッシュをヴィンセントと同じ位に位置付けた。

けど、今忘れてなかつた？

「オリバ、早く部屋を片づけろ」

「ええ！」

「私の助手。それがお前の仕事だ」

小さく舌打ちをして、オリバが部屋の奥へ進む。
入れ替わりにアッシュが郁斗に近づいてきた。

「ほう、人間は初めて見たな」

「…？ どうして…！」

思わず叫んでしまいそうになつた口を、アッシュが右手で押さえる。

「オリバに聞こえるぞ」

小声で囁ひ、先ほど受け取つた書類をポイと捨ててしまつ。

「これは興味を注がれるなあ。私はリトービスについて研究している。今は亡き人間を調べてみたいと思つていたところだ」

ニヤリと笑みを浮かべながら顔を近づけてくる。

声を出せない郁斗はバレてしまつたことと、調べてみたいと言つたアッシュの言葉に目を見開くばかり。

「つひおい、そんなに怯えた顔をするな」

解放した右手で郁斗の額を突く。

「あの、どうして僕が…」

「そんなもの、見ればわかる」

そんな簡単にバレちゃつたの…！？

驚きを隠せない郁斗にアッシュが続ける。

「イクト、お前また来い」

「え？ それは…」

「うん、 そうだな。私の研究に付き合ってくれれば、見返りとして私の研究資料を見せてやろう。高いぞ？」

郁斗はドキッとした。

アッシュさんはリトビスの研究をしてるってことは、きっと物知りな人だ。

郁斗は記憶がない。

だから、自分の記憶を呼び戻すより先に、この世界のことを知りうとした。

が、ケイトには何度か話を放らかされたことがある。
それは話しへることなのか。だとしても、今の郁斗には知る手がない。

アッシュなら容易く教えてくれそうだ。

心が揺れる。

「先生！ お手伝いくださいよ。」

「あ

最後に「待ってるが」だと聞い、アッシュコロナの手の中を歩いていった。

研究室からの帰り道。

「男勝りな人だつたな…」

アッシュの言葉が頭に響く。

今の僕には知ることが必要だ。それが自分を知ることが手がかりにもなると信じて。

角を曲がろうとしたとき、知った声が聞こえて足を止めた。そつと覗くと、アスライトとヴィンセントが立っていた。

「それであつちはどうですか」

「特に変わった様子はない。奴らの情報もつかめてないしな。イクトはどうだ?」

「あいつ、全然と言つていいくほどに無能ですよ

郁斗の胸がチクリと痛む。

「記憶が戻った様子もない。兄上、このままいいんですか?」

「奴らと関わりがあるやも知れんからな。まだしばらくは様子を見よ。今度ルシフィールと会うことになつていて。その時にまた今後のことを決めよう」

二人が去った後。

郁斗は未だにその場所を動けずにいた。

急に込み上げてきた孤独感。鼻の奥がつんとする。

奴らって誰?
僕はただの厄介者?

この世界で、僕はあまりにも無力だ。

「ねえケイト、昨日の続きを話してよ」

その晩、郁斗はベッドの上でケイトに話しかけた。
ケイトも自分のベッドに腰かける。

「… そうでしたね。では話しましょうか」

ケイトは一瞬表情を曇らせたが、ゆっくり口を開いた。

「リトビスの人間は、全員ある集団によつて消されました

「消された…？」

イエ・ダウム

「10年前、赤月の宵イエ・ダウム」という集団が現れ、禁断魔法で強大な魔獣をつくりだしました。その禁断魔法というのが、人間の命を媒体としたものです」

「命を使って…？」

「獣族も魔族も魔力をもつています。様々な魔力が混合するよりも、魔力をもたない人間を使って、純粋で強い魔獣をつくりましたのです」

鼓動が速くなるのを感じた郁斗は、自分の胸元をおさえる。話を聞いているだけなのに、感情が揺さぶられる。

「そしてあの日、リトビスから人間が消えました

消えた。

郁斗の中に恐怖が渦巻く。

「魔獣が現れてから、リトビスを黒雲が包み、不気味な赤い月がありました」

ケイトの声が小さくなる。

10年前となればケイトも経験したのだ。思い出したくなくて放らかしたのだ。

「じめん」

郁斗は謝っていた。

「いえ、イクト殿が何故謝るのですか」

「だって、僕が嫌なこと思い出させたから」

「もう済んだことです。リトビスは平和ですよ」

けれどいたたまれなくて、郁斗は俯いたままだつた。
そのせいか、ケイトの言葉を聞き取れなかつた。

「今度は何も起こらなければいいのですが…」

〔二〕

晴れやか日差しが庭に降りそそぐ。
実に心地好い日。

「イクトー！ できたよ！」

若草が生い茂る庭に座っている郁斗に、カミアが花の冠を差し出す。

「上手だね。のせてあげるよ」

郁斗は花の冠をカミアの頭にのせた。カミアはその場で嬉しそうにぐるぐる回ってみせる。

「かわいい？」

「うん。すうへ」

「ふふっ。みんなに見せてくるー！」

駆け出したカミアを微笑ましく見ていた郁斗が立ち上ると、ケイトが近づいてきた。

「ありがとうございます、イクト殿」

「別にいいんだよ」

「仕事をされていたのに、カミア様のわがままで」

それは数分前のこと。

ヴィンセントの部屋で書類整理をしていた郁斗。するとカミアがやつてきて離れなくなつたのだ。

「遊ぼ！」を連呼するカミアを見かねたヴィンセントが一人を部屋から出し、今に至る。

「そういえばさ、カミアってアスライトさんの子ども？」

「いいえ、王は結婚していませんよ」

「それじゃあ両親は？」

郁斗がまづいと思つてゐる時には遅かった。
表情を少し曇らせて、ケイトが話す。

「カミア様のお母様、ルミア様は王の姉です。つまり、アスライト様やヴィンセント様とは、姪と伯父の関係にあたります。王族特有の白い耳と尾が、そのあかしです」

確かに、あの一人も白かつたような…
にしても、姪かあ。だからヴィンセントさんをヴィルつて呼んでた
んだ

「ルミア様はもともとお体が弱く、出産時に…。お父様も流行り病で数年前に…」

親がいない。

カミアの性格からは考えつかないことに、郁斗は動搖する。あの年頃で両親がいないというのは、とても悲しいことだ。ショックで、口をきくこともできなくなるかもしない。

だが、カミアはとても表情豊かだ。

それなのに、親がない。

安易に聞くべきじやなかつた。

「幼い頃からお世話をしていた僕が、一緒にこの城へ移りました。でもカミア様はショックで心を閉ざしてしまって…。でもイクト殿を見つけたあの日から、表情がとても豊かになりました。イクト殿には感謝しています」

頭を下げるケイトに郁斗が慌てる。

「そんな、僕はなにも…」

「それでは、僕は部屋の掃除をしてきますので、カミア様のことお願いします」

ケイトは城へ戻ってしまった。

すると、入れ違いでカミアが駆けてくる。その手には花の冠がもうひとつ。

「イクトのもつべつあげたよ
「僕のも~」

目線を合わせるようにならがむと、カミアが冠を郁斗の頭にのせた。
そして「ここ」、「ここ」と言しながら頭を撫でる。

「イクトもつべつあげたんだよ
「僕が~」

身に覚えのなこと、郁斗は首をかしげる。

「うそ。お花の冠の作り方も、教えてくれたんだよ。その時にね、
カミアはいいこだから、笑顔でいるのが一番なんだって」

はて、そんなことを言つただろつか?

たつた4日間の記憶を探つても、それらしきものを見あたらない。

「そうだ! お城の人を見せたら、これくれたの」

カミアの手には、赤い風船と細い糸。

「イクトつべつて
「いいよ」

自分で膨らませられるのか心配したが、思つたよりたやすく風船は膨らんだ。

「わあ」とカミアが喜ぶ。

ある程度まで大きくすると、へたりを糸で結んだ。

「どうぞ」
「ありがとうー。」

嬉しさのあまり走り出したカミアは、すぐのところへ転んでしまつた。

郁斗が慌てて駆け寄ると、小さな手から風船が離れる。

「ああ！ 風船ー。」

風船は高くのぼったかと思つと、風にあおられ、近くの木に引っかつた。

立ち上がったカミアは物欲しそうに見上げる。

「イクト…どれる?」

上田遣いで詫かれ、拒否することはできなかつた。

「やつてみよつか」

「本当ー」

郁斗は頭上の冠を地面におき、木に近づいた。枝を掴んでみるもの、枝は細く、体重をかけてしまえば簡単に折れてしまつだらつ。

びひつよつか…

郁斗はもう一度、木の上の風船を見上げる。

風でも吹いて、勝手におつてこないかなあ…

ありもしないことを考えていた郁斗の田が見開く。
風も吹いてないのに、風船が木から離れ、ふよふよと田の前にめり
てきたのだ。

「ほ、本当におりてきた」
「イクトす」「ー、本当にとれたー」

「う、うん…」

なんだらう今。勝手に風船が…

すると、背後でザツといつ草を踏む音が聞こえた。

振り向くとそこにいたのは赤髪の女。

郁斗がアスライトと初めて会ったとき、突然現れた女だった。

「おいお前」

「はい？」

「今ここに、他に誰かいたか？」

「ここにはカミアとイクトだけだよ」

女は顎に手をそえ、「気のせいだつたのか？」と呟く。そして郁斗を見た。

鋭い目に見つめられ、郁斗の体がはねる。まさに獣のよくなすだ。

「ふん、邪魔したな」

「あ、あの！」

踵を返した彼女を呼び止める。

「話をしたいんですけど」

「私とか？ 私はお前と話す」ではない
「僕があるんです」

女は小さなため息をつくと「わかった」と一言言った。

「カミア、悪いけどケイトのところへ帰れる？」

「もう遊ばないの？」

「」めん、お話があるんだ。終わったら会って行くから

返事を渋るカミアだったが、郁斗がもう一度名前を呼ぶと「うん、わかった」と小さく言った。

「で、話とはなんだ」

女と二人きりになつた郁斗は緊張していた。

あの時の、アスライトを前にしたときの感覚。それに似ていた。

「あ、あの。あなたは僕について何か知りませんか」

王室で一緒にいた彼女だ。

城の中でも郁斗が人間であることを知つてゐる数少ない一人だ。ともあれば、郁斗の今おかれている立場。それに、郁斗の知らない事を教えてくれるかもしれない、と思ったのだ。

「おかしな事を訊く。お前は自分の事を知らないのか」

「生憎、僕は僕の事がわかりません。でも、僕が人間だと知つてゐるあなたなら、僕が知らない事を知つてゐる。例えば、黒眼を隠さなきやならない理由」

表情を変えることがなかつた女が、郁斗を見てクスリと笑つた。

「イクトといつたか。お前、鈍感で能天氣に城で日々を送つてゐるのかと思つたが、以外に頭が冴えるようだ。気が変わつた。答える

」ことのできる範囲でなら教えてやるわ」

「え、急になんで…」

「気に入ったからだ、お前を。リトビス唯一の人間。私の名はシャリー・シpton。好きなように呼べ」

先程までピリピリとしたオーラを放っていた女、シャリーの雰囲気がガラリと変わり、郁斗の肩の力が抜ける。

無愛想な人かと思ったけど、本当は親しみやすい人なのかな…

「で、何が聞きたい？」

「あの、魔力って誰にでも見えるんですか？」

それは昨日のこと。アッシュに会ったときだ。

オリバはなんとも言つてなかつたが、アッシュは一目郁斗を見ただけで人間だと気づいた。

それを疑問に思ったのだ。

「鍛練した者ならば見える。そういうた類いの者にならバレるかもしれない。安心しろ、その魔力を纏つた服を着ていれば多少は気づかれる」

「それって、アッシュさんはすごい人なんですか？」

「会つたのか。変わつたやつだろ？」

淡々と話していたシャリーはじりりと郁斗を見る。

「…本当に訊きたいのはそんなことじゃないだろ？」「あ、そうでした」

今思い出した様子の郁斗にシャリーはため息をつく。

「お前が黒眼を隠さなければならぬ理由か…。それは黒が魔族の王の証であるからだ」

「お、王…？」

「これまた突拍子もない話に顔をしかめる。

「だがその血は途絶えた。10年前の事は聞いたか？」

郁斗が頷くとシャリーは「そうか」と、目を伏せて言った。
それは郁斗を哀れに思つての表情だろうか。それとも過去の悲しみを思つてのものか。郁斗にはわからなかつた。

「10年前、奴らの手によつて当時の王は殺された。そして、最後の王も戦いで命を落とした。まだ成人してもない子どもだったのに

…」

話を聞いている間、郁斗は胸の内が熱くなっていた。

この感情は悲しみ、悔過。

どうも他人事でないような気がしてならなかつた。

「王の血が絶つた今、証である黒眼を晒すのは危険きわまりない」

「あの、王がないのなら、今どうなつてるんですか？」

「少年王の遺言で、側近の一人が後をこなしている。周りの貴族からは、別で新しい王をたてるべきだ、と騒いでいるがな」

魔族最後の王。どんな子だつたのだろう。

そんなことを考えていた郁斗は、自分がとても思い詰めた表情をしていたことに気づかなかつた。

「おい、顔が青いぞ」

「すいません…」

「別にお前と関係があるとは言つてない。ただの昔話だ」

「そうですけど」

「今日はここまでだ。私は訓練に行く」

シャリーが去つた後も、郁斗は冷めない胸の熱をおさえよいつしていた。

魔族の王、かあ…

郁斗は城内の廊下を歩きながら、先程のシャリーの話を思い出していた。

10年前の事。

そんなにひどい状況だったのか。

話すケイトとシャリーの表情は、とても悲しそうだった。

しかし、郁斗が一番気になっていたのは、少年王のことだった。

シャリーさんは関係ないって言つてたけど、違つ氣がする。知つてるよつな、知らないよつな。

うーん…

自分の考えてこることが整理できず、頭の中が混乱してきた時。鼻をつんと刺す匂い。

「うー！ 焦げ臭い…」

目を上げると、先の部屋から真っ黒な煙が出ているのに気づいた。慌てて中を覗いてみると、そこは調理室のようで、煙があがる調理場の近くで、少女がおろおろしていた。

「どうしよう！ 焼き芋をひやつた！ ビックリかなきや……」

少女は錯乱しているようすで、動き回る度に肩まである縁の髪が揺れる。

盆を使って煙を払った。

「大丈夫！？」

見ていられなくなつた郁斗が声をかけると、少女が振り向く。

「煙出てたけど……」

「『めんなさい。私、クッキーを焼いてたんだけど、焼きすぎて……』

少女の視線の先には、もはやクッキーとは呼びがたい、炭のようないつ黒な物体。

「あらり……」

「また作りなおさないと。1時間かかったのに」

「僕でよかつたら手伝おうか。2人の方が早いだろ？から」「本当……」

少女が嬉しそうに笑う。

「じゃあお願ひするわ。私はリューン」

「僕は郁斗」

リューンを手伝うことになつた郁斗は、彼女の言われたことを手伝えばいいと思っていたが、今、自分の手の動きに驚いていた。

「イクト、手際いいね。作つたことあるの？」

今、イクトは一人でクッキー生地を作つていた。不思議なことに、次に何をすればいいのか、何を混ぜればいいのか。手順がわかるのだ。今も橢円形に生地を丸めている。

「ある…のかな？」

「なんで疑問？」

「よく覚えてなくつて。でも少しだけ…」記憶の欠片を繋げる。

「僕が、作ったクッキーが焼けるのを待つてると、香りに誘われて来て、僕と一緒に焼きあがるのを待つてるんだ。尻尾をずっと左右に振つて。焼きあがるといつも一緒に食べて、おいしつて吠えて

「

『ワン！ ワン！』

郁斗の脳裏がフワッショレ、吠え声が響いた。

「タロー……？」

動きが止まつた郁斗をリューンが覗き込む。

「イクト？」止まつた郁斗の顔を見ていたリューンが声をあげた。

「あ　　つー！」

その声に我に返る郁斗。気づけばリューンが自分を指で指していた。

「思ひ出した！　イクトってヴィンセントさんの従者してゐんじやないの？」

「う、うん。知つてゐるの？」

「お兄ちゃんから聞いてたの。ヴィンセントさんに従者がついたつて」

彼女の兄に覚えがない郁斗は首をかしげる。

「私のお兄ちゃん、副隊長してて、リイドってこの

リューンの笑つた顔がリイドと重なる。

「えっ！ リイドさんの一…？」

「うん、妹」

本当、笑顔がそつくりなことに郁斗は驚いた。

「気づかなかつたよ」

「私も、今思い出したの」

思わぬことで話が弾み、着々とクッキーは作られていった。郁斗もいつの間にか先程の現象を忘れていた。そして數十分後。

「できたよ」

「わあ！」

一人の目の前には、小さなバスケットに山盛りのクッキー。リューンが顔を近づけ、匂いをかぐ。

「いい匂い。一つもらつていい？」「どうぞ」

一枚口にふくむと、その表情が明るくなる。

「おこしーー イクトすーーよ

「ありがとう。で、これは誰にあげるの?」

「カミアちゃんよ。昨日クッキーが食べたいって言わされて。これなら大喜びしてくれそ」

「カミア? じゃあ僕も行つていーかな。これから会うつもりだつんだ」

「もうろん。行きましょ」

リューンはもう一枚クッキーを口へ放った。

カミアは部屋のソファの上で、クマのぬいぐるみを抱いて、寝転がっていた。

「ケイトー。イクトはまだかな

「シャーリーさんとお話をされているのです。じょじょに我慢しましょ

「

棚の上を掃除しているケイトが答える。

「リューンも、クッキー持つてきてくれないし」「もう少しすれば来ますよ」

ケイトがそう言つたとき、ドアがノックされた。

「カミアちゃん。クッキーできたよ」

入つてきたリューンと郁斗に、ふてくされていたカミアはすぐさまソファから降りた。

「イクトとリューンが一緒に来た！」
「はいカミアちゃん。クッキーだよ」
「わーい！」

バスケットをカミアに手渡していくと、ケイトが近づいてくる。

「二人ともどこで一緒になつたんですか」「うん、調理室でね」「おじしいー」

カミアが大きな声で言つ。

バスケットを受け取つたままクッキーを頬張つていた。

「リューン、上手になつたね」
「それ、実はイクトが作ったの」
「イクトが？ す、じい！」

カミアが皿を輝かせていると、横からケイトが一枚取つた。

「おいしいですね。イクト殿が料理上手だとは
いや、自分でもよくわからないんだけどね」
「お、なにかい匂いがするなあ」

別の声が聞こえ、振り向くとドアの前にリイドが立つていた。

「あ、お兄ちゃん
「クッキーか、俺にもくれよ」

カミアが「はい」と差し出す前に、長い腕が伸びて一枚取つた。

「あ、イケるな。リューンお前か？」
「残念、それはイクトが作ったの。って、これ一回皿じゃない」
「へえ、以外な特技発見だな」
「作つてゐるところを見てたけど、全く無駄がなかつたのよ。あれは
熟練の技よ」

話している兄妹を見て、郁斗は本当に似てるなあ、と思つてゐた。髪の色はもちろんだが、雰囲気や性格がどこか似てゐる。

兄妹かあ。なんかいいな

その時、別の足音が聞こえた。

「おー、煩いぞお前、ひー」

部屋の熱を一瞬にして冷ましてしまつた低く声の主、ワインセントが立っていた。

鋭い目がじろりと郁斗を見た。

「お前はこんなところで遊んでいたのか

「いや、そうではなくて……」

「ヴィルー！ お前も食つか？」

そけへリイドが割り込んできた。冷徹なワインセントは、いつまでも話しかけるのは彼くらいだらう。

「なんだそれは」

「イクト特製クッキー！ お前菓子好きだろ」

ええっ！ ヴィンセントさんがお菓子好き！？

以外な好みに心の中で叫ぶ。

「ふん。誰がそんな…」

「突つ張らなくてもいいんだぜ。ほら、尻尾揺れてるぞ」

リイドが揺れる由に尻を一いや一笑いながら見た。

「……お前はつ……ングッ！」

怒鳴りうとしたのだから。大口を開けた瞬間、リイドがクッキーを押し込んだ。

その光景に郁斗はドキドキしながら様子を伺う。

「感想は？」

リイドに訊かれ、ヴィンセントは小さく呟くと「…つまこ」と言った。その言葉にほつと胸を撫で下ろす。

これで少しは距離が縮まつただろうが、と思つ郁斗だった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0899z/>

あおに重なる

2011年12月30日22時46分発行